

2021 Eye's  
新潟ここだけ物語

想い | つくる | 伝える

新発田市  
(旧加治川村)  
聖籠町

[ F u u d ]  
2021  
夏号  
—季刊—

に  
い  
が  
た  
の  
家  
宝

ごんばろう ● ニッポン!

Take Free  
ご自由にお持ちください

県内で昔から栽培されてきた、いろいろな野菜や果物の種。新潟県農業総合研究所園芸研究センターが保存している膨大な量にのぼる種のなかから、とくに形の珍しさで選んだ種の数々。なかには栽培が途絶えた貴重な品種の種もある。(協力:新潟県農業総合研究所園芸研究センター)



今回の取材先は  
新潟県農業総合研究所 園芸研究センター  
センター長 宮島利功さん

カメラマンの  
取材メモ [2]  
②



園芸研究センターの宮島利功センター長。今まで「ふうど」をはじめ、多くの取材でお世話になってきた。私と彼は大学の農学部で同級生。彼は在学中からずっと花卉の専門家として研究を続けているので、大学での勉強が全く生かされていない、カメラマンの私にとってはちょっと眩しい存在だ。

今回の取材で6月に訪ねると「いよいよ、来年定年だよ」との言葉。そうか、ずいぶん時が経ったのだなあ。少し寂しさを感じながらも、この機会に宮島さんの40年近い研究人生を聞いてみたいなり、後日改めてセンターを訪ねた。

宮島さんは1984年に新潟県職員として就職後、数回の転勤を挟んで、多くをこの研究センターで、花卉の栽培・育種の研究に当たってきた。キクの開花時期の調整技術、切り花を長く持たせる技術、チューリップでは多くの新品種育成の研究にかかわった。

「チューリップは種をまいて花が咲くまで5年、そこから選別しながら球根を増やし、市場に出るまで20年以上かかる。こういう仕事は我々のような公的な研究機関でないとできないよね」と宮島さん。長い仕事だから、転勤や退職で、ほかの研究員に後を託さなければならないこともよくある。そこは組織として仕事をしているのだから、みんな割り切っていて、手放すことへの悔いはないという。「でもね、やっぱり自分がかかわった植物には、想いも愛情もありますよ、自分の手を離れてもいつまでも気になるもの」と笑う。

「定年を前にしてどう?」と聞いた。「うーん、大学生の時からずっと花卉の研究ひとすじでやって来られたことは、すごく幸せだったと思う」。

一番多く仕事をしたという場所へ案内してもらい、宮島さんの写真を撮らせてもらった。彼がセンターを去っても、生み出した花たちはこれからもずっと、人々を楽しませてくれる。

写真、文章／スタジオF(t) 渡部佳則

①研究センター内のユリの圃場で。同級生同士、お互い、ちょっと照れながらの撮影。  
②研究員として、とても長い時間を過ごしたという研究センターの実験室。顕微鏡をのぞきながら「最近は役職上、こうしたこと、しなくなつたなあと」笑う。  
③チューリップの種。2012年、ふうどの取材の際に撮らせてもらった。

#### 編集後記

種子は、究極のサステナビリティだった。種を撒けば花が咲き実がなる。人間は、その葉や実を収穫して命を養っている。その傍で、種とり用の実は盛りが過ぎても、なお極限まで命を燃やし子孫を残す。種は、翌年も、またその翌年も、場合によっては10年先20年先の実りをも約束する。さらに縦文遺跡から出土したクルミが、いまも長岡市のとある岸辺で盛んな樹勢を誇っている例もある。また東南アジアの内陸部にあるラオス産のなすが、環境の違う新潟で種子になるまでの生育を全うするなど、自然のなかで育まれた種子は、時代も国境も超える運びを備えていた。原稿を書きあげた後、長い間、冷蔵庫に保管していた小豆を5粒ほどプランターに撒いてみた。たぶん無理だろうと思っていたが、何と1週間ほどで発芽し、いまも茎を伸ばしている。あらためて種が秘める力と自然界の偉大さに気づいた。そんな生命力が強く、地方色豊かな品種の種が新潟にまだ沢山残されていた。これら農家が守ってきた数々の品種の種は、「美食の国にいがた」をもっと魅力的にするボテンシャルになるだろう。(渡川)

#### 発行所

まごころ印刷の  
株式会社 タカヨシ ふうど 編集室

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 私たちは新潟の食、文化、風土の伝承を通じて持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNIGATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店など工房、朱鷺メッセ、新潟NPO協会、新潟絵巻、新潟加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandai、ホテルタイアーハ、ホテル日航新潟、リューゼン新潟市美術文化会館、〈東区〉桑名病院、パティリーカフェオーレ、ドムース・ヌーベル、〈西区〉新潟ふるさと村、新潟市附庸図書館、佐潟荘、〈南区〉新潟市農業活性化研究センター、〈北区〉新潟せんべい王国、ピューフ島嶼、新潟空港、瀬川公民館、〈江南区〉介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田園図書館、北文化博物館、〈西蒲区〉カーペギュラリーやまほし、川内自動車、新潟鉄道資料館【新潟市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新發田市生涯学習センター、新發田市市民文化会館、新發田市立図書館、豊浦地区公民館【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡市立中央図書館、長岡市立中央図書館、長岡西病院、やまと復興交流館おたらる【燕市】分水ビターラーメン【出雲崎町】越後出雲崎天領の里【湯沢町】雪国觀光舎 越後湯沢温泉【南魚沼市】桜苑【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡、佐渡市立図書館【東京都】  
【渋谷区】表参道・新潟館スペース【中央区】ブリッジにいがた・千代田区・新潟市東京事務所

本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス  
バインダー



この印刷物は環境にやさしい  
米ぬか油を使用したライスインクで  
印刷しています。

新潟には、貴重な農作物がたくさん隠れている。

野菜本来の味や香りを楽しめる在来作物である。

その土地で独自の進化をとげた固有の品種の種を、

いつたい、どんな種で、どのように種をとるのか。

農家が自家採種し、何世代も守つてきた作物である。

小さな体に風土と文化を抱える、種の世界に近づいてみた。

## 美味しい千カラ



6月22日、土をはねのけ顔をだした大峰かおりの赤ちゃん。2枚目の葉を付け始めている（上段右）。昨年の冬にとった種（下段右）。発芽から1ヶ月ほどで圃場は葉っぱの海になる（下段左：写真提供 株式会社そうえん）。ほかの枝豆の最盛期に、ようやく開花期を迎える（上段左：写真提供 株式会社そうえん）。



### 旦那さま作り

ところで一年目の失敗の原因は、何だったのだろう。

枝豆には早く種を蒔いて生育する早生種と、早く種を蒔くと大きくなりすぎる晩生種があり、種を蒔く時期の見極めが大切なのだぞう。大峰かおりの場合、「種蒔きのベストタイミングは、六月二十日から七月五日まで。それより早くても遅くとも駄目です。大峰かおりのような晩生種は、日長時間

本格的な商品栽培を始めて、今年で十三年目。今では四十アールおよそ千二百坪の圃場で大峰かおりを栽培し、地元スーパーや農産物直売所などにもき豆を出荷する他、ジエラート店や菓子屋向けに莢から出した豆を生のまま冷凍して加工素材としての人気が高く、もぎ豆を上回る売り上げになつたそうだ。

の長短を見て育ちます。日が短くなり、秋が近づいてくることを察知すると、子孫を残そうとして花をつけ始め、九月下旬から十月初期に収穫できる品種です。そんなことも知らず、一般的な豆と同じように四月に種蒔きをしたのが失敗でした。そのうえ肥料もやつた結果、成長しすぎた訳です。そのままの土地に土着した在来種には、一般的な栽培方法が通用しなかったのだ。

大峰かおりには、もうひとつ難しい条件がある。「旦那さま作りをしてやらないと駄目なんですよ」。え、旦那さま作り？「通常の枝豆より約二倍の広い栽培面積が必要なんです。畠の幅も、茎と茎との間隔も広くしてやらないと、いい実をつけてくれません。つまり面積に対する収量が少ない贅沢な品種です」と効率優先の現代農業とは真逆な現状を、愉快そうに語ってくれた。

### カラカラの音が合図

大峰かおりの収穫期は、九月二十五日から十月十日までの約二週間。

おとそ千二百坪の圃場で大峰かおりを栽培し、地元スーパーや農産物直売所などにもき豆を出荷する他、ジエラート店や菓子屋向けに莢から出した豆を生のまま冷凍して加工素材としての人気が高く、もぎ豆を上回る売り上げになつたそうだ。

の仕事は、終わらない。来年のための種とりが待っているのである。ではどのようにして種をとるのだろうか。

最後まで疑問に思つたことがあ



懐かしい土壁の建物を背にする下條莊市さん(右)。種とりの作業に欠かせないブリキ製の唐箕(上)。

### 想い 山裾のテロワール

それは三十粒の種を分けても落っこちることから始まつた。

昔から旧加治川村の山間部の集落だけで自家用として作られていました。大粒で香り高い枝豆がある。秋元では「彼岸豆」と呼ばれていた。その旨さにリスペクトされたひとりの農家が、世に出したいという思いに駆られ、ついに未来に続く重い扉をこじ開けた。その人は新発田市の大規模農家、下條莊市さんである。いまは「大峰かおり」と呼ぶ、その隠れた枝豆との出会いは、十五年ほど前の秋のこと。友人の家の稻刈りの手伝いに行き、翌年に稲刈りの手伝いに行き、翌年に耳を傾けていた小野さんは、「実際に栽培してみます」と、ひと握りほどの種を大事そうに持ち帰った。それは失敗しながらも辛うじて採れた貴重な種だった。それから二年。種を託したことも忘れ、慌しく衝撃を受けた。作つてみては、とう友人の誘いに軽くのり、翌年の春に三十粒ほどの種を分けて馳走になった枝豆があまりに美味しく、希少な種を手にした瞬間、「枝豆作りの素人が、栽培が難しいとされる在来種を作れるかどうか不安になり、後悔しました」。案の定、その不安は的中。

四月に畑の隅に種を蒔き、無事に芽が出た時はほっとしたが、太陽の光が熱を帯びるにつれ、草丈がぐんぐん成長し、その高さは大人の背丈ほどに。その様子は下條

さんによれば「ジャックと豆の木」だったそうだ。伸びすぎた莢は倒伏し、虫害も発生。期待して育ったがならない理由を身をもつて体験。こうして商品化の夢は、同時に実はつかず、自分で手に負えない品種であることを思い知られた。同時に、他の農家が作られた大きな実はつかず、自分では手に負えない品種であることを思ふ。同時に、他の農家が作られたことから始まつた。

メジヤーへの道のり

枝豆を研究している小野長昭さんが門口に立った。それまでの経過に耳を傾けていた小野さんは、「実際に栽培してみます」と、ひと握りほどの種を大事そうに持ち帰った。それは失敗しながらも辛うじて採れた貴重な種だった。それから二年。種を託したことも忘れ、慌しく衝撃を受けた。作つてみては、とう友人の誘いに軽くのり、翌年の春に三十粒ほどの種を分けて馳走になった枝豆があまりに美味しく、希少な種を手にした瞬間、「枝豆作りの素人が、栽培が難しいとされる在来種を作れるかどうか不安になり、後悔しました」。案の定、その不安は的中。

枝豆を研究している小野長昭さんが門口に立った。それまでの経過に耳を傾けていた小野さんは、「実際に栽培してみます」と、ひと握りほどの種を大事そうに持ち帰った。それは失敗しながらも辛うじて採れた貴重な種だった。それから二年。種を託したことも忘れ、慌しく衝撃を受けた。作

鶯ノ木鉛筆の花。花弁の色が他の品種よりやや薄い。



水洗いした鶯ノ木鉛筆の種

## 鶯ノ木鉛筆

戦前に新潟市南区(旧白根市)塩俵地区に導入され、その後、鶯ノ木地区の篤農家により選抜固定された鉛筆系のなす。果皮も肉質も柔らかく、小さく栽培したものは浅漬けに、大きくしたものは焼きなすなど、いろいろな料理に用いられる。(写真提供:小田切文朗 新潟市農林水産部農業活性化研究センター)

かぐらなんばんの花



水洗い後のかぐらなんばんの種

## かぐらなんばん

中越・魚沼・上越地方の山手に分布している在来種の唐辛子。神楽のお面のような形から、その名がついたと言われている。100年以上前から栽培されてきたと伝わる山古志のものは、果肉がそれほど辛くない。(写真提供:小田切文朗 新潟市農林水産部農業活性化研究センター)



雄花の芯を雌花にこすりつけ花粉づけしている様子。



雄花の芯を雌花にこすりつけ花粉づけしている様子。



雄花の芯を雌花にこすりつけ花粉づけしている様子。

## 雉子かぼちゃ

昭和初期に新潟県で育成され、果皮の模様が雉の羽根の模様に似ていることから名付けられた品種。関屋地区(新潟市中央区)を中心として県内に広く普及し「関屋かぼちゃ」とも呼ばれた。しかし戦時に採種体制が混乱し、その後導入された会津かぼちゃと交雑し一時は無くなったが、ジーンバンクから新潟市農業活性化研究センターが種を入手し復活。果肉がねっとりとして煮汁が浸み込みやすいことから煮物や味噌汁の具などに用いられる。(写真提供:小田切文朗 新潟市農林水産部農業活性化研究センター)

結実して間もない頃の莢の内部。  
種を守るために皮膜がある。



寄居かぶの種

## 寄居かぶ

1680年代から寄居村(現新潟市)で栽培されてきた在来種の寄居かぶ。種まきから収穫までの期間が短く、甘みがあり、きめ細かく柔らかい肉質が特徴。(写真提供:小田切文朗 新潟市農林水産部農業活性化研究センター)



細長い莢のなかに種ができる。

農業の世界は、品種間の淘汰が急速ピッチで進んでいる。少数の優良品種の全般的な普及とともに、地元で親しまれてきた特徴的な在来品種が、市場の片隅に追いやられてしまつたのである。在来品種とは、ある地方で昔から受け継がれてきた品種のこと。代々農家が美味しいという理由で固定的な形質を守つてることで固定的な形質を守つてきた。その種は農家にとって家宝に匹敵するものだったにもかかわらず、改良品種が市場を凌駕する現在、種とりをする農家が減り、その技術も消えそろくなっている。そんな

生きてる文化財

つくる 遺産の守り方

農業の世界は、品種間の淘汰が急速ピッチで進んでいる。少数の優良品種の全般的な普及とともに、地元で親しまれてきた特徴的な在来品種が、市場の片隅に追いやられてしまつたのである。在来品種とは、ある地方で昔から受け継がれてきた品種のこと。代々農家が美味しいという理由で固定的な形質を守つてきた。その種は農家にとって家宝に匹敵するものだったにもかかわらず、改良品種が市場を凌駕する現在、種とりをする農家が減り、その技術も消えそろくなっている。そんな

なかで、地域の財産を守ろうと活動をはじめたグループがある。五年前に発足した、園芸作物の栽培研究者や在来作物の栽培農家、料理研究家などで構成される『にいがた在来作物研究会』である。前項で紹介した下條莊市さんと小野長昭さんも主要なメンバーとして活動している。

研究会が把握している新潟県の在来作物は、枝豆やなすなどの二十八種類の作物に、個別の品種が九十六種類あり、これに花き類を加えるとさらに数が増えるそうだ。それらの優れた形質を次代に伝えるために正しく種をとり、それを維持保存していくことが重要だと研究会会長の小田切文朗さんはいう。それは、どういうことなのか。「例えば新潟市で約三百年前から栽培されている在来種の寄居かぶがあります。それは植物で、生きています。その一生は二年と短く、命に限りのある弱い存在です。種子をとつて次の代のかぶを作らなければなりません。その間に幻のかぶになってしまいます。それは残念だ。『ですから昔の人が残してくれた地域の宝物である在来作物を、私たちの世代なくしてはいけないと私は思っています。地域の人びとが、その命をつなげるためにも守つていかなければいけないのです』。そして、もうひとつ文化的な側面でも価値があるという。

「私が山形大学農学部で学んだ時の恩師に、青葉高という教授がいました。先生は熱心に国内の在来作物

袋をかけ、開花のタイミングを見逃さずに、雄しべから花粉をとり、より新鮮なうちに雌しべに受粉させます。その後、結実したことを確認してから、完熟するまで待ちます。完熟したら収穫し、実から種を取り、それを水洗いし、十分に乾燥させてから密閉容器に入れ、冷暗所で保管します」。そういえば以前、山間部の畑の片隅に、茶色くなつても放置されたままになつているなすを見たことがあります。なぜ収穫しないのか不思議だつたが、それが種とり用のなすだったことを、この時ははじめて知った。

「種とりのための交配作業は、繊細な手作業が問われますが、数をこなせば技術は習得できます。ただ在来品種は、もともと固有の風土で育

てきましたのですから、種をまく適期や開花の時期などが土地によつて異なりますので、昔から継承されてきた、その品種だけの栽培知識の

伝承が重要なんです」。なるほど昔からのものを変えないためには、昔の人々が何をやっていたのか、最後に小田切さんは、「在来作物は、それぞれの品種ごとに、硬さ・味・食感・調理法の豊富さなど違った面が多く、今の野菜にはない特徴があります。それ違う違いを大切に守りたいです。そうしたマイナーなものに向けるまなざしは、広く生き物の多様性を大切にすることに通じ、さらに入間に対しても一人ひとりのあるがままを受け容れる心にも繋がると考えています。野菜も人も地域も個性があつていいと思います。そんな思いもあり在来作物の発掘と正しい形質の維持保存に取り組んでいます」と結ぶ。小田切さんはじめ研究会の人たちは、時代の片隅で時を過ごす小さな種たちを愛おしむ心と、その才能を伸ばす知恵と力をを持つプロ集団だったのだ。

## いろいろな個性があつていい

では、正しく種をとるためには、どうすればいいのですか。

「まず別の品種との交雑を避ける対策が重要です。種をとる親株を選定し、例えはウリ類やなすなどでは、大きな優れた花を選び、開花の前日に他の品種の花粉がつかないように

を研究された結果、「在来作物は生きた文化財である」という名言を残されました。文化財とは人間の文化活動によつて作りだされたもの。在来作物はその地域の気象と土の中でも、その地域の人びとに何世代にもわたり作られ、育てられ、残されたものだから大事にしないといけない、と常々言われておられました。私も園芸作物の育種をする仕事の関係上、県内各地の在来作物を調査した経験から、恩師の言葉どおりだと思います」。ただスーパーや大型の農業資材店などで流通している在来種の種は、新潟から遠く離れた地方や海外で採種されたものが多々、もともとの形質が正しく守られていないのが現状だという。



にいがた在来作物研究会会長の小田切文朗さん。

# 種を愛おしむ人びと

